

日 時 令和8年6月8日（月）午前10時～
場 所 蒲都市役所 本館3階 305会議室

1 開会

2 議題

(1) まちづくり助成金事業について（別紙1）

事務局より、助成金事業概要、令和7・8年度事業予定、相談状況について説明

・相談においては、会員への謝金は対象外とし、外部の専門家が必要な場合のみ対象である旨説明している。知り合いに安い謝礼でという話がたまに来るが、プロの方をお願いしてもらっている状況。一方で、団体の言うことも一理あるのかなと感じている。

・センターでの支援では、団体の弁護士になり、どうしたら思いを実現できるかを一緒に考えるようにしている。今年度に申請相談を受けている9件以外にも、立ち話程度で話を聞いているものもある。ルールに乗っ取ってやらないといけないとは思いますが、もう少し歩み寄った方がいいのでは等、ご意見あれば頂きたい。

・助成金事業は税金で行っているものであり、個人の思いや楽しみだけでやるものは違うので、明確にしておかなければならない。

・最近の事業を見ていると、単発のイベントで終わってしまう傾向があると感じている。助成金をもらって事業を行うのはスタート地点であり、その後が大事。今相談中の事業についても、次に繋げていく形にしないといけない。謝金については、事業の予算を検討する中で、まずは自己資金でと考えるのが当然だと思う。

・出店料と協賛金を払い助成金事業のイベントに参加したが、仲間内で盛り上がっているだけの印象を受けた。協賛が多く集まっていたため、助成金をもらわなくてもできたのではと思った。

・出店者として参加して欲しいと言われた事業があるが、イベントを行う目的が明確ではなかった。災害が起きたときの炊き出しなど、防災に関連した出店をお願いされるならわかるが…。このイベントも協賛金協力の話があり、お金集めが先行しているイベントが多くなっている。1回のイベントで終わりではなく、次に繋げられる形にできるとよい。

・事業の目的が商店街の振興ということであれば、自分の知り合いの店を集めてということではなく、商店街の人たちを巻き込む必要がある。

・個別相談から申請支援という前に、ミニセミナーや相談会のような、柔らかな形での助成金を知る機会があるといいのではないか。

・仲間内で盛り上がり、何かをやろうとなったときに、この助成金というのはどうかと思った。

・防災に関連したコミュニティづくりについては、実際に被災したとき、地元だ

けで対応するのは難しいので、地元を離れた人が蒲郡を応援したいということであれば、応援団を外部につくっておくことも必要だと思う。自分も出身地が被災した経験があり、県人会を立ち上げて年に1回マルシェを行い、復興支援をしている。地元で一緒にやれる核となる人がいるとよい。

- ・地元にも話をしたようだが、協力を得るのが難しいとのこと。地域ごとに防災の取り組みも違うため、外からのアプローチは難しい面もあるようだ。

- ・助成金の申請というより、自分たちの団体での自己資金の作り方を教えることも良いかもしれない。

- ・協賛金ありきで行おうとする団体が多い。やりたいことがあるからお金が必要となるはずが、お金を確保してからやろうという流れになっている。現在まで続けている子ども達への活動は、日本財団の協力が得られるようになり、食材費等を出してもらえることで継続できた。活動を行っている中で色々な人と繋がりができ、継続できる活動へとつながっている。活動を始めた頃は自己負担で食材費等を出していた。スタートの段階では、自分で汗をかいて行うしかない。

- ・応援したくなる活動であるかということが大事だと思う。

- ・助成金の宣伝を皆さんにしてもらっているおかげで、様々な分野の方から相談がある。相談から新たな人と接点ができ、次の動きに繋がることもあり、申請数や助成事業数だけでなく、相談から次に繋がることも重要だと感じている。

- ・助成金申請の相談となると、お金をどうするかという話にまずなる。感覚的な小さな思いを実現するためにどんな人と繋がる必要があるか、というような相談がお金の相談の前にあってもいいと思う。

- ・学習会、セミナー等を行うとやはりいいかも。

(2) 協働モデル事業について（別紙2）

事務局より、令和8年度協働モデル事業について説明

- ・今年度から事業を行っていくが、どこを目指していくのかなど、明確になっていない部分もあるので、率直なご意見をいただき、実際に進めていく中で取り入れていきたい。

- ・そもそも合理的配慮とは？というところが分からない。そこから知らないと何をするか分からないとなる。

- ・福祉大学の付属高校に勤めていたことがあったが、聞こえない方が生徒におり、聴覚障害のある方は、口を見て話している内容を理解するため、黒板を見て話すなどはだめで、口の動きが見えるようにしないといけないということを理解した。合理的配慮といっても、障がいの特性に応じて対応方法も色々と変わる。

- ・本モデル事業の背景について補足したい。センターでは、企業など様々なところから、合理的配慮についての相談を多く受けている。歴史的背景としては、1898年に塩津村で始まった拾石訓誨義塾は、聴覚障害、視覚障害に対する教育を行う学校として、全国で3番目に作られている。また、蒲郡は観光地であるため、全国の視覚障害の方が鍼灸師の資格を取って働きにくるとい

う流れがあり、観光業や繊維産業などでも障がいを持った方が働きに来ていた。80代くらいの方はそういった流れを知っているので、障がい者の社会参加という発想がある。昭和50年代には障がい者の働く事業所として、蒲郡市に愛知太陽の家を誘致している。一方で、まちをどうしていくのかといった動きが弱かった側面もあった。平成に入り、愛知県が人にやさしい街づくりを推進するということで、交通や公共施設におけるバリアフリー化の動きが始まった。20年以上に渡り行っている公共施設等におけるバリアフリーアセスメントは県内でも少ない事例であり、こうした取組により、公共施設への理解は広まってきた一方で、民間への浸透が課題となっている。近年増えている市内の大型プロジェクトに対してもこうした動きが引き継いでいない。官民連携、民間主体のまちづくりが進む中、行政職員だけでなく民間への浸透が必要だと感じている。ヨットイベントを20年間行っているが、経営者の方々がイベントで障がい者とふれあい、雇用につながった例もあった。民間への理解を広める方法としては、講演会等ではなく、当事者と関わる機会を作り、考えるきっかけを作ることが大事だと考えている。民間も行政も当事者も一緒に関わり合いながら考え、相談できる場づくりを進めていきたい。

- ・このモデル事業は、イベントや事業をやる側が合理的配慮をするという観点のものか。障がい者が参加しづらい状況があるというよりも、障がい者が何をやりたいのか、やりたいことを実現するために、共に対等な関係で考えていくという方がよいのではないか。1年目にヒアリングというよりも、1年目からやりながら考えていく方がよい。神戸では、車いすの人のビーチで海に入りたいという思いをどうしたら実現できるのか、一緒に考えることから取組んだ。そういったことだと思う。

- ・私がやっていることで何か協力できることがあれば協力する。

- ・なぜイベントに関わるものに限定するのかと考えていたが、お互いを知る機会としてイベントがよいということか。

- ・例えば、合理的配慮を学ぶ研修会をやることよりも現場で経験しながらということではないか。

- ・聞こえない映画監督を知っているので、記録映画等撮ってもらうなど、費用はかかると思うが繋がります。

- ・アジパラで色々あるので今年度実施できればいい機会であった。

- ・皆さんの意見等を聞いていて、これまでイベント主催者として、出店希望者に何がやれますか？と聞いていたが、何をやりたいですか？という聞き方がよいと思った。また、受付で筆談ができる態勢を整えること等できることがあるなと思った。昨日のイベントでは、来場されていた年配の方が雨で歩きにくくなり、両脇を抱えられて帰られた姿を見て、貸出できる車いすやベビーカーがあればよかったなと思った。

- ・合理的配慮をまだ理解できていないが、どのイベントに参加しても今話のあったような配慮がされていれば、誰でも参加しやすいと思った。蒲郡が全国で3番目に障害者のための学校ができた市という話も知らなかった。イベ

ントの中でそういった歴史のわかる展示ブースがあると伝わりやすいし、気づきを持って帰れると思う。

- ・編み物教室を昔行っていた。動きの悪い子がおり、周りに話を聞くと字が読めない子だった。障がいのある方や外国の方、年齢も関係なく、一緒に活動してきた。県の社会福祉協議会では、「ふくし」を「ふだんのくらしのしあわせ」ですと説明している。合理的配慮という言葉は、「合理的」という言葉が機械的に感じてしまう。考えや意識を広げることが1番難しいと思うが、広げるために進めていってほしいと思う。

- ・最近学校に外国籍の方が増えている。ひらがなを振ったプリントが用意されていて、必要な方がもらえるようになっていた。

- ・今の時代は、従来見えていない部分が見えてくるようになり、色々なことを気にかけ、ケアしなければならなくなっている。日本国籍であっても日本語が分からない、発達障害など、今は皆が何かしらを抱えている。インクルーシブということは、共創共生課がやればよいというものではなく、全庁横断的なテーマとして取り組むものではないか。

- ・行政としてのインクルーシブについて、教育の関連では、北部小学校に特別支援学校を併設しようという流れがあるが、これも教育現場だけでなく観光などを含めて他の分野が横断的に関わるべきものと考えている。行政のイベントをひとつとっても、色々な方を受け入れられる体制になっているかという、そうではない。その辺りを整理していくのは意義があることと感じている。前に話題になったポケモンのマンホールにベンチを置いたイベントへの批判の例もあり、配慮すべき点が増えていると感じている。関係団体を交えて学ぶきっかけがあるとよいと思う。

- ・モデル事業ということで、民間という切り口ではあるが、行政職員が入って関わることは重要であると考えている。職員が一緒になって考える機会が必要であり、特に若手職員にはその視点を持ってほしい。

- ・職員も生活者として、生活の中で同様に感じていることが当然にあり、普段の暮らしの中から感じる身近な疑問を行政として解決するといったことが必要となる。

今回の事業については、目的を見失わないように、ゴールを確認しながら進めていくことが大事ではないかと思う。

- ・今後やりながら進め方等検討していくことになるので、適宜ご意見、ご参加をいただければと思う。

3 その他

<令和8年度の会議予定について>

- ・第2回 令和8年8月31日（月）で調整中
- ・第3回 令和8年12月頃
- ・第4回 令和9年2月頃